【原著・基礎】

男子淋菌性尿道炎由来 Neisseria gonorrhoeae の各種抗菌薬に対する感受性と cefixime 低感受性株 penA 遺伝子の解析

小野寺昭一 $^{1)}$ ・清田 浩 $^{2)}$ ・遠藤 勝久 $^{3)}$ ・伊藤 博之 $^{4)}$ ・細部 高英 $^{5)}$ 讃岐邦太郎 3 ・吉田 正樹 $^{1)}$ ・高倉真理子 $^{6)}$ ・高畑 正裕 6

- 1) 東京慈恵会医科大学感染制御部*
- 2) 東京慈恵会医科大学附属青戸病院泌尿器科
- 3) JR 東京総合病院泌尿器科
- 4) 公田クリニック
- 5) 細部医院
- 6 富山化学工業株式会社綜合研究所

(平成22年8月30日受付・平成22年9月17日受理)

男子淋菌性尿道炎由来 Neisseria gonorrhoeae において、2000 年頃より cefixime (CFIX) など経口セフェム系薬に対する感受性が低下する傾向が認められ、これらの株では PBP2 (PenA) の構造遺伝子 penA の塩基配列がモザイク様に変異しているとの報告が多数ある。今回、東京慈恵会医科大学附属病院ならびに首都圏の関連施設で分離された新鮮臨床株(2009 年株) の各種抗菌薬に対する薬剤感受性を測定し、1999 年、2003 年および 2006 年分離株の成績と比較するとともに、新たに確認された CFIX 低感受性株における penA 遺伝子の塩基配列を解析した。その結果、CFIX に対する感受性率は 2006 年まで 96.6%以上で推移していたが、2009 年株では 47.4%に低下していた。注射セフェム系薬、ceftriaxone に対する感受性率は、いずれの年度も 100% であったが、2009 年株では MIC 累積分布の低感受性化傾向が認められた。Spectinomycin に対しては、いずれの年度も感受性率は 100% であった。Levofloxacin に対する 2009 年株の感受性率は 5.3% であり、2006 年株の 17.0% より、耐性化がさらに進行していた。2009 年分離 CFIX 低感受性株の penA 遺伝子はこれまでの報告と同様、他の Neisseria 属菌種である Neisseria perflava/sicca または Neisseria flavescens の penA 遺伝子に近似したモザイク変異を含むことが認められた。

今回検討した 2009 年株の日本性感染症学会のガイドラインで推奨されている薬剤に対する感受性率は 100% であったが、経口および注射セフェム系薬では低感受性化の傾向が認められ、今後も継続したサーベイランスの必要性が示唆された。

Key words: mosaic, penA, susceptibility, cefixime, Neisseria gonorrhoeae

淋菌感染症は sexually transmitted diseases(STD)として、性器クラミジア感染症と並び、臨床的に頻度の高い感染症である 11 。治療の中心であった、ペニシリンやテトラサイクリンに対する耐性菌の出現後は経口セフェム系薬やフルオロキノロン系薬が使用されてきた。しかしながら、1990年代後半より、これらの薬剤に耐性を示す男子淋菌性尿道炎由来 Neisseria gonorrhoeae が増加し、臨床的に大きな問題になっている $^{2-6}$ 。フルオロキノロンは耐性株の著しい増加のため、日本においては淋菌感染症の治療に推奨されておらず、米国においても 2007年、治療薬リストから除外された 70 。また、2000年頃より出現した cefixime (CFIX) 低感受性の N. gonorrhoeae は、現在、臨床分離株の 30% ほどに達しているとの報告もあり、これら薬剤が担ってきた治療選択肢を奪っている $^{5.80}$ 。この

ような背景から、現在、日本の性感染症診断・治療ガイドラインで推奨されている薬剤は、注射セフェム系薬の ceftriaxone (CTRX)、cefodizime (CDZM) および注射アミノグリコシド系薬 spectinomycin (SPCM) の非経口抗菌薬3剤となっている¹⁾。

本邦で N. gonorrhoeae における経口セフェム系薬低感受性化が確認され始めた頃より、われわれはその低感受性化の要因を検討し、これらの菌では PBP2 の構造遺伝子である penA の塩基配列がモザイク様に変異し、PenA(PBP2 蛋白)の構成アミノ酸が変化していることを認めた 9,10 。経口セフェム系薬低感受性化の傾向は、これ以後、国内また海外で多数の報告がなされ、N. gonorrhoeae の penA 塩基配列がモザイク変異していることも報告されている $^{11\sim13}$ 。また、penA 遺伝子のモザ

^{*}東京都港区西新橋 3-25-8

Oligonucleotide Primer	Sequence		
F1	5'-TCGGGCAATACCTTTATGGTGGAACAT-3'		
F2	5'-GAACGCCTGTCCGAGCTTGTC-3'		
F3	5'-ACAAGGCGGTCGAATACCATC-3'		
F4	5'-TATACCGCACTGACGCACGAC-3'		
F5	5'-GACAGTTTGCATGCTGGAGA-3'		
F6	5'-TACTGCTGGTGCGGTAGATG-3		
R1	5'-ACAACGGCGGCGGGGATATAACT-3'		
R2	5'-AACGCCCGTTGACGAACTTGC-3'		
R3	5'-CATCGCGCACGGGAGACGGTC-3'		
R4	5'-GCGAAAGTTCCAAACCTTCCT-3'		
R5	5' - CCGTCATGGGTCAAGACAGTA-3'		

Table 1. Oligonucleotide primer used in this study

イク様変異より PenA のアミノ酸配列の変化は幾種かのパターンにわかれることが報告されており $^{6.13.14}$, このうち最も一般的なものはパターン X とされ, これまでわれわれが報告してきた, 他の Neisseria 属菌種である Neisseria perflava/sicca または Neisseria flavescens の PenA に近似したモザイク変異を含むものである $^{9.10}$ 。

今回,2008年11月~2009年4月に分離された新鮮臨床株(2009年株)の薬剤感受性を測定し、これまでの感受性成績と比較するとともに、新たに確認されたCFIX低感受性株におけるPenAのアミノ酸変異を調べた。

I. 材料と方法

1. 使用菌株

東京慈恵会医科大学附属病院ならびに首都圏の関連施設で 1999 年、2003 年、2006 年および 2009 年に分離された男子淋菌性尿道炎由来 Neisseria gonorrhoeae のそれぞれ、41 株、58 株、47 株および 38 株を用いた。臨床検体は Modified Thayer-Martin selective agar(日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD、東京)に植菌し、Bio-Bag environmental chamber(type C、BD)に封入して同定施設に移送した後、5% CO $_2$ 下で 35℃、20 時間培養した。培養後、Gram 染色、oxidase tests および catalase tests を実施した。さらに Chocolate II agar (BD) に生育させ、Gonochek-II kit (EY Laboratories、San Mateo、CA)で同定を行った。分離した N. gonorrhoeae はスキムミルク中で -80℃にて保存した。これら分離株の β -lactamase 産生は β -check(Nippon Bio-Supp、Center、東京)で確認した。

2. 使用薬剤

Penicillin G (PCG, 明治製菓株式会社, 東京), clavulanic acid/amoxicillin (CVA/AMPC, グラクソ・スミスクライン株式会社, 東京), cefixime (CFIX, アステラス製薬株式会社, 東京), cefteram (CFTM, 富山化学工業株式会社, 東京), ceftriaxone (CTRX, 中外製薬株式会社, 東京), cefodizime (CDZM, 杏林製薬株式会社, 東京), aztreonam (AZT, エーザイ株式会社, 東京), spectinomycin (SPCM, シグマ アルドリッチ ジャパン株式会

社, 東京), levofloxacin(LVFX, 第一三共株式会社, 東京), azithromycin(AZM, ファイザー株式会社, 東京), tetracycline(TC, シグマ アルドリッチ ジャパン株式会社) を用いた。

3. 薬剤感受性の測定

各年度臨床分離株を Chocolate II agar 平板培地に植菌し、5% CO₂下で35℃、20 時間培養した後、Clinical and Laboratory Standards Institute (CLSI) のガイドライン¹⁵⁾に基づき、1% Iso VitaleX (BD) を含む GC agar base (BD) を用いた寒天平板希釈法にて MIC を測定した。接種菌量は10⁴ colony forming unit (CFU) /spotとし、5% CO₂インキュベーターで35℃、20 時間培養し、肉眼的に生育の認められない最小濃度を MIC とした。また、CLSI の MIC Interpretive Standards¹⁶⁾に基づき、各年度、各薬剤感受性率を算出した。なお、LVFX については設定がないため、ofloxacin(OFLX)の MIC Interpretive Standards を参考に設定した。

4. CFIX 低感受性 N. gonorrhoeae の penA 遺伝子の解析

2009 年分離の CFIX 低感受性 (MIC: 0.5 μg/mL およ 143, 146, 142, 139, 148) について penA 遺伝子を解析 した。Modified Thayer-Martin Agar 上で 23 時間,35℃ 5% CO₂下で培養した。生育した菌を 100 μL の溶菌液 (10 mM Tris-HCl pH 8.0, 1 mM EDTA, 1% triton-X) & 懸濁させた後, 100℃ 10 分加熱後 15,000×g で 10 分間遠 心し、その上清を PCR の template とした。penA 遺伝子 の全長を, これまでの報告^{9,10)}に基づき, oligonucleotides primer O F1 (forward sequences) & R1 (reverse sequences) (Table 1), および Ex Taq polymerase (タカラ バイオ株式会社、大津)を用い PCR で増幅した。PCR は94℃, 2分間の変性の後, 94℃, 30秒の変性, 55℃, 30 秒のアニーリング, 72℃, 3 分間の伸長を 30 サイクル 行った後、最後に72℃、1分間の伸長の条件で行った。 増幅された penA 遺伝子の解析は oligonucleotides の F1, F2, F3, F4, F5, F6 および R1, R2, R3, R4, R5

Antibacterial		1999 (n = 41	1)		2003 (n = 58))
agent	MIC ₅₀ (μg/mL)	MIC $_{90}$ MIC range (μ g/mL) (μ g/mL)		MIC ₅₀ (μg/mL)	MIC ₉₀ (μ g/mL)	MIC range (μg/mL)
PCG	ND	ND	ND	1	4	0.03-4
CVA/AMPC	ND	ND	ND	0.5	1	0.03 - 2
CFIX	0.008	0.03	0.002 - 0.125	0.03	0.5	0.002 - 0.5
CFTM	0.06	0.125	0.002 - 0.5	0.125	0.5	0.008 - 1
CTRX	0.008	0.015	$\leq 0.001 - 0.06$	0.03	0.125	0.002 - 0.125
CDZM	0.03	0.06	0.002 - 0.25	0.03	0.125	0.002 - 0.125
AZT	0.25	0.5	0.06 - 8	0.25	4	0.03 - 8
SPCM	8	16	4-16	8	16	2-16
LVFX	0.5	8	0.002 - 16	4	8	0.004 - 16
AZM	ND	ND	ND	ND	ND	ND
TC	ND	ND	ND	ND	ND	ND

Table 2. Antibacterial activity of agents against clinical N. gonorrhoeae isolates

				Ī			
Antibacterial		2006 (n = 47)	7)	2009 (n = 38)			
agent	MIC50	MIC90	MIC range	MIC50	MIC90	MIC range	
agent	(μ g/mL)	(μ g/mL)	(μ g/mL)	(μ g/mL)	$(\mu \text{ g/mL})$	(μ g/mL)	
PCG	1	4	0.06 - 64	1	4	0.06 - 4	
CVA/AMPC	0.5	1	0.06 - 2	1	2	0.125 - 4	
CFIX	0.06	0.125	0.004 - 0.25	0.5	0.5	0.008 - 1	
CFTM	0.125	0.5	0.004 - 1	0.25	0.5	0.004 - 1	
CTRX	0.03	0.06	0.002 - 0.125	0.06	0.125	0.004 - 0.25	
CDZM	0.06	0.125	0.002 - 0.125	0.06	0.25	0.004 - 0.5	
AZT	0.5	4	0.031 - 8	4	16	0.125 - 16	
SPCM	16	16	4-16	16	16	8-32	
LVFX	4	8	0.004 - 16	8	8	0.002 - 16	
AZM	0.25	0.5	0.008 - 1	0.25	1	0.008 - 8	
TC	1	2	0.06 - 16	1	4	0.125 - 32	

 $Shading \ shows \ antibacterial \ activity \ of \ or al \ and \ parenteral \ cephem \ antibiotics \ and \ monobactam \ antibiotic.$

Table 3. Percentage of susceptible strains of antibacterial agents in clinical N. gonorrhoeae isolates

Antibacterial agent	Breakpoint MIC (μg/mL) ^a	Percentage of susceptible strains in					
		1999 (41) ^b	2003 (58)	2006 (47)	2009 (38)		
PCG	0.06	N.D.	1.7	4.3	10.5		
CFIX	0.25	100	96.6	100	47.4		
CTRX	0.25	100	100	100	100		
SPCM	32	100	100	100	100		
LVFX $^{\rm c}$	0.125	41.5	17.2	17.0	5.3		

^a: CLSI, ^b: No. of strains, ^c: Assumed from OFLX breakpoint MIC

(Table 1) を用い^{9,10}, Dragon Genomics Center (タカラバイオ株式会社,四日市) にて行った。遺伝子の解析結果はアミノ酸に置換し、N. gonorrhoeae LM306 (ペニシリン 感受性株; GenBank accession no. M32091), NG-3 (2001年に分離された CFIX 低感受性株; GenBank accession no. AB071984) および NG-122 (2006年に分離された CFIX 低感受性株)の PenA と比較した。また、他の Neisseria 属である N. perflava/sicca 1654/1659 (GenBank accession no. X76422), N. flavescens NCTC 8263 (GenBank accession no. M26645), Neisseria cinerea NCTC 10294 (GenBank accession no. X59540)の PenA

との比較を行った。

II. 結果

1. 薬剤感受性

1999 年から 3~4 年間間隔の 1999 年,2003 年,2006 年および 2009 年の各年度臨床分離株における薬剤感受性を Table 2 に、また、各薬剤に対する感受性率を Table 3 に示す。なお、 β -lactamase 産生株の割合は 1999 年 : 1/41 株 : 2.4%, 2003 年 : 3/58 株 : 5.2%, 2006 年 : 2/47 株 : 4.3%, 2009 年 : 0/38 株 : 0% であった。

1999年にはすでにキノロン耐性菌の存在が認められ、LVFXの MIC $_{90}$ 値は $8 \mu g/mL$ と高かった。一方、経口セ

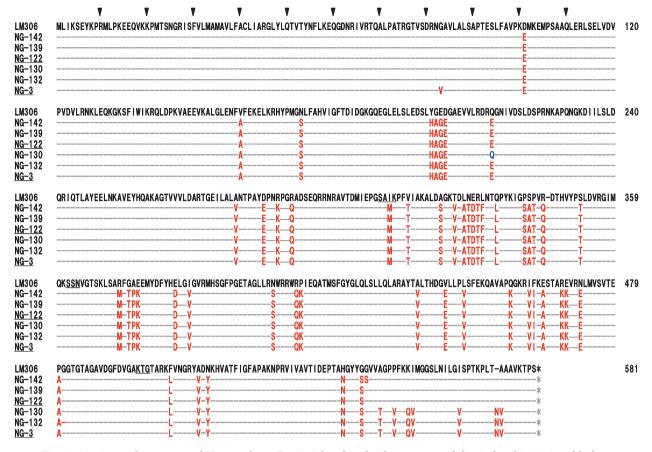


Fig. 1. Amino acid sequences of *N. gonorrhoeae* PenA with reduced cefixime susceptibility isolated in 2009 and before. LM306: penicillin-susceptible strain, NG-142, NG-139, NG-130 and NG-132 (isolated in 2009), NG-122 (isolated in 2006) and NG-3 (isolated in 2001): the mosaic-like strain with reduced cefixime susceptibility. Active sites of serine residue (*SXXK*, *SXN* and *KTG*)-conserved motifs are indicated by underlining. Dashes indicate amino acid residues identical to those of LM306. Asterisks are stop codons.

フェム系薬の CFIX, CFTM の 1999 年分離株に対する MIC50, MIC90値はともに低く(Table 2), CFIX に対する 感受性率は 100% であった (Table 3)。また、注射セフェ ム系薬の CTRX に対する感受性率も 100% であったが、 モノバクタム系注射薬 AZT に対しては、すでに感受性 の低い株が含まれていた(Tables 2, 3)。2003 年になる といずれの β-ラクタム系薬も MIC range の高濃度域へ の拡がりと MIC₉₀値の上昇が認められた。また、LVFX では MIC₅ 値のさらなる上昇が認められた。2006 年分離 株の感受性は2003年分離株と比較していずれの薬剤も 大きな感受性の低下は認められなかった。しかし、2009 年株の感受性は2006年度と比較すると,経口セフェム系 薬 (CFIX) および注射セフェム系薬 (CTRX, CDZM) に おける感受性の低下がみられた。即ち, CFIX, CDZM の MIC₉₀ 値がそれぞれ 4 倍および 2 倍に, CFIX, CTRX, CDZM の MIC range 上限値がそれぞれ4倍, 2倍, 4 倍に増大していた (Table 2)。経口セフェム系薬, CFIX に対する 2006 年までの感受性率は 96.6% 以上で推移し ていたが、2009年分離株では47.4%に低下した(Table 3)。2009年分離株に対して、注射セフェム系薬、CTRX

は MIC 分布で低感受性化傾向が認められるものの, 感受性率は依然 100% であった。SPCM に対しては 1999 年から 2009 年までの分離株で大きな感受性の変化は認められず, 感受性率は 100% であり, SPCM 耐性菌の出現は当該施設では認められなかった。LVFX に対しては感受性率が 1999 年には 41.5% であったが, 年々低下し, 2009 年度は 5.3% と耐性化がさらに進行していた(Table 3)。

2. CFIX 低感受性 N. gonorrhoeae の PenA 蛋白の変異と薬剤感受性

2009 年分離 CFIX 低感受性 10 株の PenA はすべての株でモザイク様変異が認められた。変異アミノ酸の種類はほとんど同一であったが、A549 以降にモザイク変異がないもの (I 型) とあるもの (II 型) の違いで 2 パターンに分かれた。10 株中 3 株 (NG-142, 139, 148) が I型, 7株 (NG-130, 132, 135, 136, 137, 143, 146) が II 型であった。Fig. 1 に今回分離された株のうち、I 型のNG-142, NG-139, II 型の NG-130, NG-132 におけるアミノ酸配列を示す。

I型は 2008 年にわれわれが報告した NG-122 (2006 年

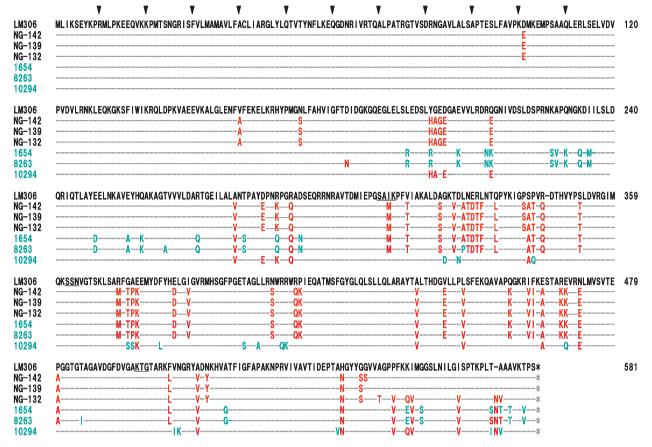


Fig. 2. Amino acid sequences of N. gonorrhoeae and other Neisseria spp. PenA.

LM306: penicillin-susceptible strain, NG-142, NG-139 and NG-132: the mosaic-like strain with reduced cefixime susceptibility isolated in 2009, 1654: *N. perflava/sicca* 1654/1659, 8263: *N. flavescens* NCTC 8263, 10294: *N. cinerea* NCTC 10294. Active sites of serine residue (SXXK, SXN, and KTG)-conserved motifs are indicated by underlining. Dashes indicate amino acid residues identical to those of LM306. Asterisks are stop codons.

分離菌)、II 型は 2002 年に報告した CFIX 低感受性株 NG-3 (2001 年分離菌) とほぼ同一のアミノ酸変異であった (Fig. 1) ^{9,10)}。なお、II 型の NG-130 は他の 9 株でみられた Q214E の変異がなく、感受性株と同じアミノ酸 (Q) を保有していた。G545S 変異はすべての株にみられたが、I 型の 1 株、NG-142 ではさらに、これまでに報告のない G546S の変異が認められた (Fig. 1、GenBank Accession number;AB536877 として登録済)。これら CFIX 低感受性株の PenA は他の Neisseria 属の N. perflava/sicca 1654/1659 (GenBank Accession number;X76422)、あるいは N. flavescens NCTC 8263 (GenBank Accession number;M26645)の PenA に近似しており、いずれの株にも活性中心近傍に N. gonorrhoeae には認められない 2 つのアミノ酸(I312M と V316T)の変異が認められた (Fig. 2)。

PenA の解析を行った CFIX 低感受性 10 株はすべて LVFX に対して耐性であった(Table 4)。また、CFIX の MIC 値は $0.5~\mu$ g/mL あるいは $1~\mu$ g/mL であり、セフェム薬感受性の ATCC 19424 株 における MIC 値 $(0.001~\mu$ g/mL) と比べ、感受性は 1/512–1/1024 に低下し

た。これらに対して、CTRX の MIC 値は $0.03\sim0.12~\mu g/$ mL であり、比較的良好な抗菌活性を保有していたが、ATCC 19424 株の MIC 値($0.00025~\mu g/$ mL)に比べ感受性は 1/128-1/512 に低下した。さらに、これまでの報告にみられない G546S 変異が認められた NG-142 株では、検討した経口および注射セフェムの 4 薬剤に対し、他の9 株のセフェム薬低感受性株よりもさらに 1-1/16 の低感受性を示した(Table 4)。

III. 考 察

1999~2001 年当時,男子尿道炎患者から分離した N. gonorrhoeae のキノロン系薬に対する高度耐性化が臨床的に大きな問題になっており,その原因は標的酵素 ParC, GyrA の変異であることも報告されていた 4 。また,同時期,淋菌感染症治療の重要な選択肢である経口セフェム系薬に対しても,低感受性を示す N. gonorrhoeae の出現が認められ始めていた 2 . 3 。東京慈恵会医科大学附属病院ならびに首都圏の関連施設で1999 年より開始したわれわれのサーベイランスの成績では,1999 年の CFIX の MIC $_{50}$ 値ならびに MIC range はそれぞれ 0.03 μ g/mL, 0.002~0.125 μ g/mL であるのに対し,2003 年で

Strain	MIC (μg/mL)							
	PCG	CFIX	CFTM	CTRX	CDZM	SPCM	LVFX	
NG-142	4	1	1	0.12	0.5	16	8	
NG-139	1	0.5	0.5	0.06	0.12	16	8	
NG-148	4	0.5	0.5	0.06	0.25	16	8	
NG-130	2	0.5	0.5	0.06	0.12	16	16	
NG-132	4	0.5	0.5	0.06	0.12	16	8	
NG-135	1	0.5	0.5	0.06	0.12	8	4	
NG-136	4	0.5	0.5	0.06	0.12	16	8	
NG-137	4	0.5	0.5	0.12	0.25	16	16	
NG-143	2	0.5	0.5	0.06	0.06	8	16	
NG-146	0.5	0.5	0.25	0.03	0.03	16	4	
ATCC 19424	0.004	0.001	0.004	0.00025	0.00025	2	< 0.004	

Table 4. Antibacterial activity of agents against clinical *N. gonorrhoeae* isolates with reduced cefixime susceptibility

は $0.5 \mu \text{ g/mL}$, $0.002 \sim 0.5 \mu \text{ g/mL}$ と MIC₉₀ 値, MIC range 上限値はそれぞれ16倍、4倍上昇した。これらの経口セ フェム系薬に対する低感受性化のメカニズムは、当時明 らかになっていなかったが、N. gonorrhoeae では薬剤排出 ポンプの存在が報告されており17.18), 当初, われわれはキ ノロン薬耐性に引き続いて起こったセフェム薬低感受性 化は、薬剤排出機能の亢進によるものではないかと考え ていた。そこで、N. gonorrhoeae の薬剤排出ポンプ, MtrC-MtrD-MtrE efflux pump の mtrR 遺伝子発現を RT-PCR 法により検討したが、明確な結論を得ることができな かった。このため、N. gonorrhoeae penA における D345 挿入によるラクタム薬耐性の報告¹⁹⁾に基づき、セフェム 薬低感受性株の penA 遺伝子を改めて検討したところ, これらは感受性株と異なり、他の Neisseria 属菌種の penA に近似した部分を含むモザイク構造であることを 認めた9。その後,本邦のみならず,海外でも多数の同様 な報告がなされ、セフェム薬低感受性 N. gonorrhoeae の 蔓延が確認された5.11~14)。

セフェム薬低感受性株の penA 遺伝子のモザイク構造は Fig. 2 に示したように、他の Neisseria 属、特に N. per-flava/sicca 1654/1659 あるいは N. flavescens NCTC 8263の penA 遺伝子に近似しており、ヒト生体内でこれら菌種遺伝子から N. gonorrhoeae への遺伝子導入が起こり、PBP2 がモザイク構造になったものと考えられている⁹。

PBP2 の活性中心は C 末端の transpeptidase ドメインに位置し、保存配列をもつ 3 つのモチーフ (SXXK, SXN, KTG)が存在する200。SXXK モチーフは、触媒反応に重要な 2 つのアミノ酸 Ser310 と Lys313 を含んでいる。セフェム系薬に低感受性を与えていると考えられる重要な変異(I312M と V316T)は、N. perflava/sicca または N. flavescens からの遺伝子導入と考えられ、SXXK モチーフが関与する活性中心構造に大きな変化を与えているものと示唆された。また、他のモザイク様変異も活性中心の構造を変化させ、セフェム系薬の低感受性化に影響を与

えているものと考えられた。しかしながら、セフェム薬 低感受性株に認められた G545S 変異は、KTG モチーフ の下流に位置しているものの、他の Neisseria 属のいずれ の菌種もこれを所有しておらず、本変異は、薬剤の選択 圧による N. gonorrhoeae の後天的なものと考えられてい る¹⁴。

2009 年分離 CFIX 低感受性 10 株の PenA はすべての株でモザイク変異が認められたが 1 株を除いてこれまでわれわれが報告 9,10 してきたものと同一であった。これらの株はすべて I312M と V316T 変異を保有し、G545S 変異もまた、いずれの株でも認められた。モザイク変異はA549 以降にモザイク変異がない I 型と、変異がある II 型の 2 種類に分けられたが (Fig. 1)、両型で感受性にはほとんど差異がないことから、A549 以降のモザイクの有無はセフェム薬低感受性にかかわっていないものと考えられた。また、II 型の NG-130 は他の 9 株でみられたQ214E の変異がなく、感受性株と同じアミノ酸 (Q) を保有していたが、Takahata らが mosaic-3 のパターンと報告 140 しており、新規な変異ではなかった。しかし、I 型の1株 (NG-142) ではこれまでに報告のない G546S の新規な変異が認められた。

2006 年分離株の感受性を 2003 年分離株と比較すると、いずれの薬剤においても MIC $_{50}$ 値から見ると、大きな感受性の低下は認められなかった。しかし、2009 年分離株の感受性は 2006 年と比較すると、経口セフェム系薬 (CFIX) および注射セフェム系薬 (CTRX, CDZM) に対する感受性の低下が認められた。セフェム薬感受性の全体的な低下はモザイク変異株を中心とする低感受性株の分離頻度の増加によるものと考えられるが、MIC range上限値の上昇については、新たなモザイク変異 (G546S)株の出現などがその原因と考えられた。他方、セフェム薬低感受性化の要因としては、penA以外にもmtrR, porB1b, ponA などの変異に関する報告 21 があり、今後、これらについても明らかにしていくことが必要と考えられた。

現在、淋菌感染症に対し、フルオロキノロン系薬および経口セフェム系薬による治療は不可能あるいは不十分であるため、抗菌活性が維持されている注射セフェム系薬、CTRX、CDZM、あるいは SPCM を適正な用法・用量で使用することが重要である。日本性感染症学会のガイドラインで推奨されているこれら3薬剤に対する2009年分離株の感受性率はいずれも100%であったが、CTRXおよびCDZMのMIC累積分布では低感受性化傾向が認められており、今後も薬剤感受性、また、PenAの解析などの継続したサーベイランスが必要と考えられた。

文 南

- 性感染症 診断・治療ガイドライン 2008。日本性感 染症学会誌 2008; 19(Supplement): 49-56
- Muratani T, Akasaka S, Kobayashi T, Yamada Y, Inatomi H, Takahashi K, et al: Outbreak of cefozopran (penicillin, oral cephems, and aztreonam)resistant *Neisseria gonorrhoeae* in Japan. Antimicrob Agents Chemother 2001; 45: 3603-6
- Akasaka S, Muratani T, Yamada Y, Inatomi H, Takahashi K, Matsumoto T: Emergence of cephem- and aztreonam-high-resistant *Neisseria gonorrhoeae* that does not produce β-lactamase. J Infect Chemother 2001; 7: 49-50
- 4) Tanaka M, Nakayama H, Notomi T, Irie S, Tsunoda Y, Okadome A, et al: Antimicrobial resistance of *Neisseria gonorrhoeae* in Japan, 1993–2002: continuous increasing of ciprofloxacin-resistant isolates. Int J Antimicrob Agents 2004; 24 (Suppl 1): S15-22
- 5) Ito M, Yasuda M, Yokoi S, Ito S, Takahashi Y, Ishihara S, et al: Remarkable increase in central Japan in 2001–2002 of *Neisseria gonorrhoeae* isolates with decreased susceptibility to penicillin, tetracycline, oral cephalosporins, and fluoroquinolones. Antimicrob Agents Chemother 2004; 48: 3185-7
- 6) Ito M, Deguchi T, Mizutani K, Yasuda M, Yokoi S, Ito S, et al: Emergence and spread of *Neisseria gonor-rhoeae* clinical isolates harboring mosaic-like structure of penicillin-binding protein 2 in central Japan. Antimicrob Agents Chemother 2005; 49: 137-43
- CDC: Update to CDC's sexually transmitted diseases treatment guidelines, 2006: fluoroquinolones no longer recommended for treatment of gonococcal infections. MMWR Morb Mortal Wkly Rep 2007; 56: 332-6
- Ochiai S, Ishiko H, Yasuda M, Deguchi T: Rapid detection of the mosaic structure of the *Neisseria gonor-rhoeae penA* gene, which is associated with decreased susceptibilities to oral cephalosporins. J Clin Microbiol 2008: 46: 1804-10
- 9) Ameyama S, Onodera S, Takahata M, Minami S, Maki N, Endo K, et al: Mosaic-like structure of penicillin-binding protein 2 gene (*penA*) in clinical isolates of *Neisseria gonorrhoeae* with reduced susceptibility to cefixime. Antimicrob Agents Chemother 2002; 46: 3744-9
- Osaka K, Takakura T, Narukawa K, Takahata M, Endo K, Kiyota H, et al: Analysis of amino acid se-

- quences of penicillin-binding protein 2 in clinical isolates of *Neisseria gonorrhoeae* with reduced susceptibility to cefixime and ceftriaxone. J Infect Chemother 2008: 14: 195-203
- Ochiai S, Sekiguchi S, Hayashi A, Shimadzu M, Ishiko H, Matsushima-Nishiwaki R, et al: Decreased affinity of mosaic-structure recombinant penicillinbinding protein 2 for oral cephalosporins in *Neisseria* gonorrhoeae. J Antimicrob Chemother 2007; 60: 54-60
- 12) Wang S A, Lee M V, O'Connor N, Iverson C J, Ohye R G, Whiticar P M, et al: Multidrug-resistant Neisseria gonorrhoeae with decreased susceptibility to cefixime-Hawaii. 2001. Clin Infect Dis 2003: 37: 849-52
- 13) Whiley D M, Limnios E A, Ray S, Sloots T P, Tapsall J W: Diversity of *penA* alterations and subtypes in *Neisseria gonorrhoeae* strains from Sydney, Australia, that are less susceptible to ceftriaxone. Antimicrob Agents Chemother 2007; 51: 3111-6
- 14) Takahata S, Senju N, Osaki Y, Yoshida T, Ida T: Amino acid substitutions in mosaic penicillinbinding protein 2 associated with reduced susceptibility to cefixime in clinical isolates of Neisseria gonorrhoeae. Antimicrob Agents Chemother 2006; 50: 3638-45
- 15) Clinical and Laboratory Standards Institute: Methods for dilution antimicrobial susceptibility tests for bacteria that grow aerobically. Approved standard-Eighth Edition. M07-A8. Wayne, PA, 2009
- Clinical and Laboratory Standards Institute: Performance standards for antimicrobial susceptibility testing; Twentieth informational supplement. M100-S20. Wayne, PA, 2010
- 17) Hagman K E, Pan W, Spratt B G, Balthazar J T, Judd R C, Shafer W M: Resistance of *Neisseria gonorrhoeae* to antimicrobial hydrophobic agents is modulated by the *mtr*RCDE efflux system. Microbiology 1995; 141: 611-22
- 18) Veal W L, Nicholas R A, Shafer W M: Overexpression of the MtrC-MtrD-MtrE efflux pump due to an mtrR mutation is required for chromosomally mediated penicillin resistance in Neisseria gonorrhoeae. J Bacteriol 2002; 184: 5619-24
- 19) Brannigan J A, Tirodimos I A, Zhang Q Y, Dowson C G, Spratt B G: Insertion of an extra amino acid is the main cause of the low affinity of penicillin-binding protein 2 in penicillin-resistant strains of *Neisseria gonorrhoeae*. Mol Microbiol 1990; 4: 913-9
- 20) Powell A J, Tomberg J, Deacon A M, Nicholas R A, Davies C: Crystal structures of penicillin-binding protein 2 from penicillin-susceptible and -resistant strains of *Neisseria gonorrhoeae* reveal an unexpectedly subtle mechanism for antibiotic resistance. J Biol Chem 2009; 284: 1202-12
- 21) Lindberg R, Fredlund H, Nicholas R A, Unemo M: *Neisseria gonorrhoeae* isolates with reduced susceptibility to cefixime and ceftriaxone: association with genetic polymorphisms in *penA*, *mtrR*, *porB1b*, and *ponA*. Antimicrob Agents Chemother 2007; 51: 2117-22

Susceptibility of male gonococcal urethritis-isolated *Neisseria gonorrhoeae* against antibacterial agents and *penA* gene analysis of strains with reduced cefixime susceptibility

Shoichi Onodera¹⁾, Hiroshi Kiyota²⁾, Katsuhisa Endo³⁾, Hiroyuki Ito⁴⁾, Takahide Hosobe⁵⁾, Kunitaro Sanuki³⁾, Masaki Yoshida¹⁾, Mariko Takakura⁶⁾ and Masahiro Takahata⁶⁾

- ¹⁾ Department of Infection Control, Jikei University School of Medicine, 3–25–8 Nishishinbashi, Minato-ku, Tokyo, Japan
- ²⁾ Department of Urology, Jikei University School of Medicine, Aoto Hospital
- 3) Department of Urology, JR Tokyo General Hospital
- 4) Kuden Clinic
- 5) Hosobe Clinic
- 6) Research Laboratories, Toyama Chemical Co., Ltd.

From about 2000, male gonococcal urethritis-derived *Neisseria gonorrhoeae* strains tend to show reduced susceptibility to oral cephem agents such as cefixime(CFIX). Many reports find the base sequence of the structural gene *penA* of penicillin binding protein(PBP) 2 to be mosaic in these strains.

We measured the susceptibility of 2009 fresh clinical strains isolated in the Tokyo metropolitan area to antibacterial agents, using CLSI broth microdilution method, and comparing it to results for strains isolated in 1999, 2003, and 2006. We also analyzed the base *penA* gene sequence in 10 strains newly confirmed to show reduced CFIX susceptibility.

Results showed that 96.6% or more of strains isolated before 2006 were susceptible to CFIX, compared to only 47.4% of 2009 strains. Although 100% of strains were susceptible to cephem injection, such as ceftriaxone, the distribution of minimum inhibitory concentrations(MICs) of these agents indicated a trend toward reduced susceptibility. The susceptibility to spectinomycin was 100%. The susceptibility of isolates to levofloxacin in 2009 was 5.3%, suggesting further resistance (17.0%: isolates in 2006). For the *penA* gene of strains with reduced CFIX susceptibility, we analyzed mosaic-like *penA* gene changes. As a result, the mosaic-like *penA* gene similar to other *Neisseria* genus species, such as *Neisseria perflava/sicca* or *Neisseria flavescens*, were recognized as in past reports. These mosaics-like changes were divided into two patterns, with or without a mosaic variation after PenA, A549. This mosaic variation was almost the same as we reported. All agents recommended in guidelines by the Japanese Society for Sexually Transmitted Diseases showed susceptibility of 100%, but a trend toward reduced *N. gonorrhoeae* susceptibility to cephem antibiotics is continuing, suggesting the necessity for ongoing observation.